

## こまちダム遺跡発掘調査報告 2

反 田 C 遺 跡  
沢 目 木 遺 跡 (2次調査)

2004年3月

福島県教育委員会  
監 査 福島県文化振興事業団  
福島県土木部

## こまちダム遺跡発掘調査報告2

そり 反 沢  
た 田  
め 目  
C 遺 跡  
き 木  
遺 跡 (2次調査)



## 序 文

「こまちダム」は夏井川支流の黒森川流域の田村郡小野町菖蒲沢地内に建設が計画されている福島県営の多目的ダムです。

このダム水没予定地内及び県道振替予定地には、先人が残した貴重な埋蔵文化財が所在し、表面調査の結果、数多くの遺跡等が確認されました。

埋蔵文化財は、地域の長い歴史の中で育まれた文化的遺産であると同時に、我が国の歴史や文化の正しい理解と、将来における文化の向上発展の基礎をなすものであります。

このため、福島県教育委員会では、福島県土木部河川港湾領域ダムグループ及び県中建設事務所と埋蔵文化財の保護・保存について協議を重ね、平成11年度には県道付替予定地の表面調査、平成12年度からは試掘調査を実施し、現状保存が困難な遺跡については記録として保存することとし、平成14年度から発掘調査を実施しました。

本報告書は、平成15年度に実施した反田C遺跡と沢目木遺跡の発掘調査結果をまとめたものです。反田C遺跡からは縄文時代の土坑が、沢目木遺跡からは縄文時代早期前葉の土器等が出土しています。

今後、この報告書が県民の皆様の文化財に対する理解を深めるとともに、地域の歴史を解明するための基礎資料として、さらには生涯学習の資料として広く活用していただければ幸いに存じます。

おわりに、この発掘調査にあたり、御協力いただいた福島県土木部、財団法人福島県文化振興事業団をはじめとする関係機関並びに関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成16年3月

福島県教育委員会

教育長 高 城 俊 春



## あ い さ つ

財団法人福島県文化振興事業団では、福島県教育委員会からの委託を受けて、県内の大規模開発に先立ち対象地域内にある埋蔵文化財の調査を実施しております。小野町のこまちダム建設にかかる埋蔵文化財の調査については、平成11年度の分布調査、平成12年度の試掘調査を受けて発掘調査を平成14年度から開始しました。

本報告書は、平成15年度に発掘調査を実施した反田C遺跡・沢目木遺跡の成果をまとめたものです。反田C遺跡からは、縄文時代の落し穴状土坑が発見されました。沢目木遺跡は、昨年度に引き続いて2次調査を実施し、縄文時代の遺物包含層から早期前葉の土器が出土いたしました。

県内でも小野町は、近年磐越自動車道やあぶくま高原道路の建設にともなう多くの発掘調査が実施され、新しい考古学的調査成果が数多くあがっている地域です。これらとあわせて、本報告書が郷土の歴史を知る基礎資料として、広く役立てていただければ幸いに存じます。

終わりに、この調査にご協力いただきました小野町ならびに地元の方々に深く感謝を申し上げますとともに、埋蔵文化財の保護に今後ともより一層の御理解と御協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成16年3月

財団法人福島県文化振興事業団  
理事長 佐藤 栄佐久







## 用 例

1. 本書における遺構図の用例は、以下のとおりである。

- (1) 方位 遺構図・地形図の方位は真北をさす。方位の無いものは、全て図の真上を真北とする。
- (2) ケバ 原則として遺構内の傾斜面はケバで表現した。
- (3) 土層 基本土層はアルファベット大文字Lとローマ数字を組み合わせ、遺構内の堆積土はアルファベット小文字ℓと算用数字を組み合わせで表記した。  
(例) 基本土層—L I・L II…、遺構内堆積土—ℓ 1・ℓ 2…  
なお、土色は「新版標準土色帖」を使用し、本文中の記号は本書に基づく。
- (4) 標高 東京湾からの海拔標高を示す。
- (5) 縮尺 各挿図中に縮尺率を示した。

2. 本書における遺物図版の土器断面には、粘土積み上げ痕を一点鎖線で表記した。また、胎土中に繊維が混和されたものには土器断面に▲を付した。

3. 本書における写真図版中の番号は、挿図番号と対照できるように、遺物写真図版中に「図」と略して記した。(例) 図1—1→1—1

4. 本書で使用した略号は、次のとおりである。

小野町…O N      反田C遺跡…S T・C      沢目木遺跡…S W M      遺構外堆積土…L  
遺構内堆積土…ℓ      グリッド…G      土 坑…S K      遺物包含層…S H

5. 参考・引用文献は執筆者の敬称を省略し、序章・各編ごとにまとめて収めた。

# 目 次

## 序 章

第1節 調査経緯	1
第2節 地理的環境	4
第3節 歴史的環境	5

## 第1編 反田C遺跡

第1章 遺跡の環境と調査経過	11		
第1節 位置と地形	11		
第2節 調査経過と調査方法	11		
第2章 遺構と遺物	14		
第1節 遺構の分布と基本土層	14		
第2節 土坑と遺構外出土遺物	15		
1号土坑 (15)	2号土坑 (17)	3号土坑 (17)	遺構外出土遺物 (17)
第3章 ま と め	18		

## 第2編 沢目木遺跡（2次調査）

第1章 遺跡の環境と調査経過	21
第1節 位置と地形	21
第2節 調査経過と調査方法	22
第2章 調査の成果	24
第1節 遺構の分布と基本土層	24
第2節 遺構と遺物	24
2号遺物包含層 (24)	ピット (26)
第3章 ま と め	27
第1節 縄文時代早期の無文土器について	27
第2節 調査の総括	28

## 挿図・表 目次

### 序 章

#### 〔挿 図〕

図1 こまちダム位置図…………… 1	図3 周辺遺跡位置図…………… 6
--------------------	-------------------

図2 こまちダム調査遺跡位置図…………… 2	
------------------------	--

#### 〔 表 〕

表1 こまちダム調査遺跡一覧…………… 3	表2 こまちダム周辺遺跡一覧…………… 7
-----------------------	-----------------------

### 第1編 反田C遺跡

#### 〔挿 図〕

図1 調査範囲と工事計画図……………12	図3 基本土層図……………14
----------------------	-----------------

図2 遺構配置図……………13	図4 1～3号土坑と遺構外出土遺物……………16
-----------------	--------------------------

### 第2編 沢目木遺跡

#### 〔挿 図〕

図1 調査区位置・周辺地形図……………21	図3 遺構と遺物……………25
-----------------------	-----------------

図2 遺跡全体図・基本土層……………23	図4 沢目木遺跡出土無文土器集成……………27
----------------------	-------------------------

## 写真図版目次

### 第1編 反田C遺跡

1 調査区全景……………31	3 基本土層・1～3号土坑……………32
----------------	----------------------

2 調査区北西部……………31	4 遺構外出土土器……………32
-----------------	------------------

### 第2編 沢目木遺跡（2次調査）

1 調査区全景……………35	3 ビット……………36
----------------	--------------

2 2号遺物包含層……………35	4 2号遺物包含層出土土器……………36
------------------	----------------------

# 序 章

## 第1節 調査経緯

### 事業の概要

こまちダムは、福島県田村郡小野町大字菖蒲谷地区の夏井川の支流である二級河川黒森川上流域に建設予定の多目的ダムである。その目的は洪水対策・流水の正常な機能の維持・小野町に供給する水道用水の安定確保などである。こまちダムの型式は重力式コンクリートダムで、堤高40m、総貯水量770,000m<sup>3</sup>、総面積4km<sup>2</sup>の規模である。

### 平成14年度までの調査経緯

こまちダム建設地内の埋蔵文化財の調査は、平成10年に小野町教育委員会が本没地帯となる15haを対象にした分布調査が最初である。この調査では、周知の遺跡である2遺跡の再確認と、6遺跡が新に発見されている（『こまちダム関連遺跡群分布調査報告書』1998年）。

その後、建設予定地内の埋蔵文化財の取り扱いは福島県教育委員会が行うこととなり、福島県教育委員会に委託された財団法人福島県文化振興事業団が、県道矢吹小野線の付替道路予定路線27haについて平成11年に表面調査を実施した。その結果は、小野町教育委員会によって確認されていた上記の8遺跡のほか新たに4遺跡と遺跡推定地9箇所を確認した（『福島県内遺跡分布調査報告6』2000年）。なお、遺跡推定地とは遺物は採取できなかったものの地形からみて、遺跡の可能性が高い地点のことである。

平成12年度には、遺跡推定地7箇所について試掘調査を実施し、調査の結果、遺跡推定地2箇所が遺跡であることが判明したので、

堂田A遺跡・沢目木遺跡と名称が変更された。発掘調査を必要とする面積は堂田A遺跡が1,300m<sup>2</sup>、沢目木遺跡は1,600m<sup>2</sup>である。（『福島県内遺跡分布調査報告7』2001年）

平成13年度には黒森川右岸側の道路予定地の表面調査が実施され、遺跡推定地1箇所が確認されている。また試掘調査は堂田A遺跡・西田C遺跡・堂田遺跡と遺跡推定地4箇所について実施された。堂田A遺跡は県道の付け替え予定地が南側に変更

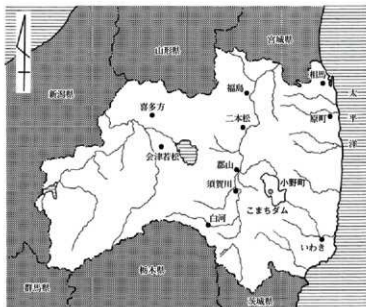


図1 こまちダム位置図

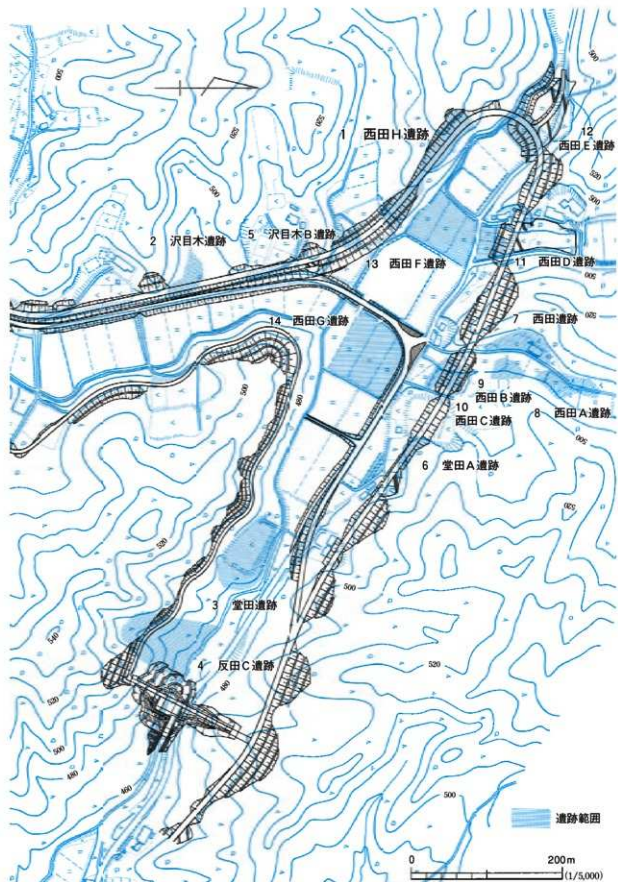


図2 こまちダム調査遺跡位置図

されたために第2次調査が実施された。調査の結果、遺跡推定地1箇所が遺跡であることが判明し西田H遺跡と名称が変更された。発掘調査を必要とする面積は堂田A遺跡が800㎡、西田H遺跡は2,700㎡である。(「福島県内遺跡分布調査報告8」9「2002・2003年」)。

平成14年度は西田H・西田A・西田B・西田D・西田E・西田F・西田Gの7遺跡と、遺跡推定地4箇所について試掘調査が実施された。西田H遺跡は未調査部分を対象に第2次調査が行われ、調査の結果、遺跡推定地のなかで2箇所が遺跡であることが判明した。これにより反田C遺跡・沢目木B遺跡と名称が変更された。発掘調査を必要とする面積は反田C遺跡が1,200㎡、沢目木B遺跡が600㎡である。また西田H遺跡は未調査部分を対象にした第2次試掘調査であったが、これによって新たに2,600㎡が遺跡の範囲として追加された(「福島県内遺跡分布調査報告9」)。

平成14年、発掘調査が沢目木遺跡と西田H遺跡で実施された。沢目木遺跡は5月から1,600㎡について1次調査を開始し、7月には調査を終了した。遺構は縄文時代早期の竪穴状遺構・掘立柱建物跡・土坑などが検出され、縄文時代早期・前期・晩期、弥生時代前期の遺物包含層も確認されている(「こまちダム遺跡発掘調査報告1」2003年)。6月からは西田H遺跡の1次調査が開始され、12月には終了した。検出された遺構は縄文時代早期・前期・晩期、奈良・平安時代の竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑・屋外焼土遺構・ピット群などである。また縄文時代早期・前期・晩期や弥生時代前期・中期の遺物包含層が確認された。

#### 平成15年度の調査経緯

平成15年度は福島県教育委員会の委託により、2名の調査員が配置され反田C・沢目木・堂田A・西田H・沢目木B遺跡の5遺跡計5,700㎡を対象に発掘調査を行うこととなった。各遺跡の発掘調査は県中建設事務所の工事工程を受けて、先行して着工する反田C遺跡と堂田A遺跡から順に実施することとした。5月上旬には反田C遺跡1,200㎡の調査を開始し、同月中旬には堂田A遺跡800㎡の調査も開始した。6月中旬には反田C遺跡の調査が終了した。

表1 こまちダム調査遺跡一覧

No	遺跡名	所在地	時代	種別
1	沢目木遺跡	小野町菖蒲谷字沢目木	縄文早・前・晩期 弥生前期	集落跡・散布地
2	西田H遺跡	小野町菖蒲谷字西田	縄文早・前・晩期 奈良・平安	集落跡・狩猟地
3	堂田遺跡	小野町菖蒲谷字反田	縄文後・晩期	散布地
4	反田C遺跡	小野町菖蒲谷字反田	縄文前期	散布地・狩猟地
5	沢目木B遺跡	小野町菖蒲谷字沢目木	縄文晩期	散布地
6	堂田A遺跡	小野町菖蒲谷字堂田	縄文早期・平安	集落跡
7	西田遺跡	小野町菖蒲谷字西田	縄文	散布地
8	西田A遺跡	小野町菖蒲谷字西田	縄文後・晩期	散布地
9	西田B遺跡	小野町菖蒲谷字西田	縄文後・晩期	散布地
10	西田C遺跡	小野町菖蒲谷字西田	縄文	散布地
11	西田D遺跡	小野町菖蒲谷字西田	縄文	散布地
12	西田E遺跡	小野町菖蒲谷字西田	縄文	散布地
13	西田F遺跡	小野町菖蒲谷字西田	縄文	散布地
14	西田G遺跡	小野町菖蒲谷字西田	縄文	散布地

引き続き沢目木遺跡の2次調査に着手した。沢目木遺跡は1次調査で未調査であった100㎡を対象とするものである。調査は4日ほどで終了した。

6月下旬には西田H遺跡3,000㎡の2次調査に着手した。まず、1次調査で未着手であった調査区東端の調査を行い、引き続き2次調査区の調査に着手した。2次調査区のなかでも急斜面である西側については、トレンチ調査で対応した。

11月中旬には堂田A遺跡の調査が終了した。11月22日には西田H遺跡の現地説明会を開催したところ、県内外から多数の見学者が訪れた。12月中旬には西田H遺跡の調査が終了し、12月17日には反田C遺跡・堂田A遺跡・西田H遺跡を県中建設事務所へ引き渡した。これにより、平成15年度のかまちダム遺跡発掘調査を終了した。

なお、年度当初に発掘調査を予定した沢目木B遺跡は、福島県教育委員会と福島県土木部との協議の結果、平成16年度以降の調査に繰り延べることとなった。

## 第2節 地理的環境

小野町は福島県の中通り地方東側、阿武隈高地のほぼ中央部を占め、田村郡の南部に位置する。小野町の境界と接する市町村は、北に船引町と大越町、北東に滝根町、南にいわき市、西に郡山市・平田村である。町域は東西12.45km、南北15.95km、面積は125.11km<sup>2</sup>である。

町内には夏井川の支流である右支夏井川が北西から南東に流れ、その支流にあたる車川・黒森川・十石川などはほぼ西から東へ、または北から南へ流れている。町の北西部には南北の帯状に連なる黒石山(896m)、高柴山(884m)、一盃山(855m)、日影山(879m)、十石山(718m)があり、東部には矢大臣山(964m)がある。

町内は「土地分類基本調査」の地形分類によると山地・丘陵地・低地に分かれる。町内の大半は山地・丘陵地に含まれている。日影山・矢大臣山などでは山頂・山腹・山麓に緩斜面が発達し、沼ノ平・上羽出庭などでは独立した丘陵地となっている。低地は町内を流れる各河川沿いにみられ、その上流域において谷底平野の発達が著しい。

地形地域の区分によると、小野町は山地・夏井川上流盆地・小野町南部小起伏地に分かれている。町中心部は夏井川上流盆地にあたる。ここでの盆地とは、谷底平野が細長く続くような山間の、あるいは谷間の平坦地を指す。

町内の表層地質には砂・泥・礫を主とする未固結堆積物と変成岩類がみられる。現河床および氾濫原には、砂礫が各河川筋に堆積している。低地には泥・砂・礫をまじえた堆積物がみられる。飯豊地区川向地域には泥炭質の地層が発達している。

町内に発達している深成岩類は花崗岩質岩石と斑輝岩質岩石とがある。町内のほぼ全域に発達しているのが花崗岩質岩石である。そのなかで、黒雲母花崗岩・複雲母花崗岩は吉野辺地区の田尻から早渡地域に、灰色黒雲母花崗岩・黒雲母花崗岩・黒雲母花崗閃緑岩などは一盃山から日影山の地域

に、角閃石黒雲母花崗閃緑岩は町内の地域にひろく発達している。反田C遺跡および沢目木遺跡も角閃石黒雲母花崗閃緑岩が発達する地域に含まれている。十石山・一盃山・矢大臣山の山頂部には斑礫岩質岩が小範囲に発達している。

鉄道はJR東日本株式会社磐越東線が、小野町南東部の小野新町駅から夏井駅へ南下しいわき駅に至る。高速交通網は新潟市といわき市を結ぶ磐越自動車道が開通し、小野インターチェンジ(I, C.)から東北自動車道郡山ジャンクションを経由し首都圏と短時間で往来できるようになった。現在は東北自動車道矢吹I, C.から福島空港を経由して、磐越自動車道小野I, C.を結ぶあぶくま高原道路の建設が進められている。

町の人口は昭和55年では14,085人であったが、平成15年(4月1日現在)には12,297人となり減少傾向を示している。気候は年平均気温が10.1℃で、年降水量は1,232mmで中通り地方の平均的な値である。最深積雪の平均値は30cm弱である。

### 第3節 歴史的環境

小野町には「福島県遺跡地図」(福島県教育委員会1996)によると117遺跡が登録されている。その後、福島県教育委員会によるあぶくま高原道路やこまちダム建設に伴う調査により29遺跡が発見され、小野町教育委員会の調査でも2遺跡が発見されている。これらの遺跡の多くは標高430~500mの位置に分布し、夏井川とその上流である右支夏井川やその支流に沿って分布している。さらに、標高600mを越える位置には遺跡はほとんど発見されていない。

時代別に見ると縄文時代の遺跡が多く、奈良・平安時代の遺跡がそれに次ぐ。逆に少ないのは、弥生・古墳時代の遺跡で、古墳は大豆柄古墳群がみられるだけである。

町内には旧石器時代の遺物は確認されていない。縄文時代草創期の遺物は、猪久保城から御子柴型尖頭器の系譜をたどれる石槍が出土しているのみである。縄文時代早期前葉には西田H遺跡から夏島式期の住居跡が検出されている。他に早期前葉のものは、鴨ヶ館跡・小滝遺跡から稲荷台式土器が、沢目木遺跡からは花輪Ⅱ式土器の無文土器、柳ヶB遺跡から日計式押型文土器などが出土している。早期中葉には長久保遺跡から竹之内式土器が出土している。早期後葉では西田H遺跡から住居跡が検出されている。鍛冶久保・本飯豊遺跡から茅山下層式期の住居跡が検出され、小滝遺跡から茅山下層式・榎木1式が出土している。早期末葉では仁井殿遺跡・鴨ヶ館跡から住居跡が検出されている。堂田A遺跡は早期後葉から末葉にかけての集落跡が検出されている。前期初頭では小滝遺跡、前期中葉では柳ヶB遺跡から集落跡が検出されている。矢大臣(新田)遺跡からは前期中葉~後期前葉にかけての集落跡が検出されている。後期には梅ノ木畑B遺跡から埋設土器や土偶などが、長賀遺跡から稲付土器が採取されている。晩期中葉では西田H遺跡から掘立柱建物跡が、長久保遺跡からは住居跡が検出されている。晩期後葉では反田B遺跡から住居跡が検出され、沢目木B遺跡から土器が出土している。縄文時代の遺跡をみると、前期中葉から前期初頭にかけての土器



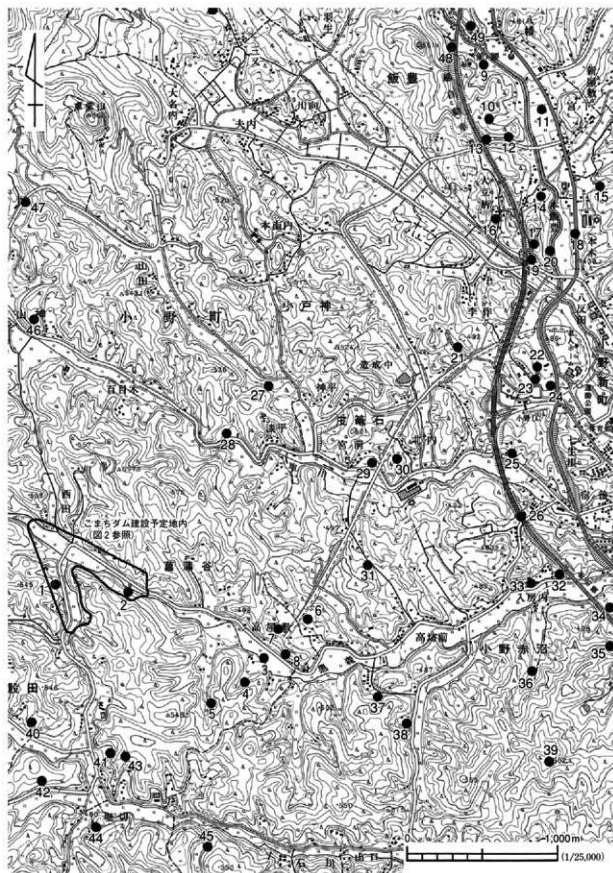


図3 周辺遺跡位置図

表2 こまちダム周辺遺跡一覧

No.	遺跡名	所在地	時代	種別
1	沢日本遺跡	小野町菖蒲谷字沢日本	縄文・弥生	集落跡・散布地
2	反田C遺跡	小野町菖蒲谷字反田	縄文	狩猟場
3	反田遺跡	小野町菖蒲谷字反田・鹿島	縄文	散布地
4	鹿島遺跡	小野町菖蒲谷字鹿島	縄文・平安・中世	集落跡
5	反田B遺跡	小野町菖蒲谷字反田	縄文	集落跡
6	柳作A遺跡	小野町菖蒲谷字北ノ内・柳作	奈良・平安	集落跡
7	柳作B遺跡	小野町菖蒲谷字柳作	縄文・近世	集落跡
8	柳作C遺跡	小野町菖蒲谷字北ノ内・柳作	奈良・平安・近世	集落跡
9	寺ノ下遺跡	小野町飯豊字寺ノ下	縄文・奈良・平安・近世	散布地
10	前久保遺跡	小野町飯豊字河沼・寺ノ下	縄文・古墳～平安	散布地
11	柿人遺跡	小野町飯豊字柿人	古墳～平安	散布地
12	作田A遺跡	小野町飯豊字作田	奈良・平安	散布地
13	作田B遺跡	小野町飯豊字作田	奈良・平安	散布地
14	本飯豊遺跡	小野町飯豊字本飯豊	奈良・平安・近世	集落跡・墓跡
15	一盃森遺跡	小野町飯豊字一盃森	奈良・平安	散布地
16	月清水遺跡	小野町飯豊字大豆柄	奈良・平安	散布地
17	大豆柄古墳群	小野町飯豊字大豆柄	古墳	古墳
18	二本木遺跡	小野町飯豊字二本木	古墳～平安	散布地
19	落合遺跡	小野町飯豊字落合	古墳～平安	集落跡
20	葛ノ木遺跡	小野町飯豊葛ノ木	奈良・平安	散布地
21	李作遺跡	小野町皮籠石字李作	奈良・平安	散布地
22	馬番遺跡	小野町小野新町字馬番・七生根	奈良・平安	散布地
23	西馬番遺跡	小野町新町字西馬番	奈良・平安	散布地
24	七生根遺跡	小野町小野新町七生根	奈良・平安	散布地
25	籠内遺跡	小野町籠石字籠内	奈良・平安	集落跡
26	五百成遺跡	小野町籠石字五百成	奈良・平安	散布地
27	神平遺跡	小野町皮籠石字神平	縄文	散布地
28	古防遺跡	小野町皮籠石字古防	縄文・奈良・平安	散布地
29	宮ノ前遺跡	小野町皮籠石字宮ノ前	古墳～平安	散布地
30	北ノ内遺跡	小野町皮籠石字北ノ内	平安・近世	集落跡
31	四郎坊遺跡	小野町小野赤沼字四郎坊	奈良・平安	散布地
32	関根前遺跡	小野町小野赤沼字関根前	奈良・平安	散布地
33	石崎遺跡	小野町小野赤沼字西ノ内	奈良・平安	散布地
34	西作遺跡	小野町小野赤沼字西作	奈良・平安	散布地
35	猪久保城跡	小野町谷津作字和久・猪久保	縄文・弥生・奈良～中世	城館跡
36	入房内遺跡	小野町小野赤沼字坊入	古墳・奈良	散布地
37	鉢塚遺跡	小野町小野赤沼字鉢沼	縄文	散布地
38	永田原遺跡	小野町小野赤沼字永田原	縄文・奈良・平安	散布地
39	小堰館跡	小野町谷津作字館	中世	城館跡
40	関場遺跡	小野町雁股田字関場	縄文・奈良・平安	散布地
41	関場B遺跡	小野町雁股田字関場	縄文・平安・近世	散布地
42	仁井殿遺跡	小野町雁股田字仁井殿	縄文	集落跡
43	黒森館跡	小野町雁股田字堀切	中世	城館跡
44	堀切遺跡	小野町雁股田字千保	縄文	散布地
45	神山B遺跡	小野町股田字新切	縄文	散布地
46	西牧館跡	小野町小野山神字八升葺	中世	城館跡
47	畑田遺跡	小野町小野山神字畑田	縄文	散布地
48	切掛遺跡	小野町飯豊切掛	奈良・平安	散布地
49	鴨ヶ館跡	小野町飯豊字館ノ腰	縄文・弥生・平安・中世	城館跡・集落跡

が出土する遺跡が多い。しかし、それらの多くは遺物包含層によるもので、集落の構成などは不明である。

弥生時代には集落跡としての確実な遺跡は知られておらず、前期の土器が沢目木・西田H遺跡から、中期の土器が鶴庭・畑ヶ田・霞作遺跡や谷津作館跡・鴨ヶ館跡などから出土している。

古墳時代では、前期の大規模な集落跡である落合遺跡が磐越自動車道の建設に伴い調査されている。後期の土器が万景E遺跡から出土している。本飯豊遺跡からは終末期の住居跡が検出されている。大豆柄古墳群の詳細な時期は不明であるが、落合・本飯豊遺跡の位置する同一丘陵にあることから、関連を窺うことができる。安橋遺跡からは滑石製の有孔円盤や土製丸玉が表採され祭祀跡が予想される。

奈良・平安時代の小野町は、平安初期に編纂された『和名類聚抄』から陸奥国安積郡小野郷であったと推定されている。おそらく、本飯豊・作田B・籠内・柳作A・柳作C・柿人・西田H・堂田A遺跡などの遺跡はその頃の郷を構成していた集落跡であろう。平安末期の作とされている阿弥陀如来座像と脇土の三尊像が、無量寺阿弥陀堂に安置されている。

中世には小野町は小野保と呼ばれているが、その頃の領主などを伝える史料がほとんどなくよく分かっていない。わずかに残っている史料から、結城朝朝や石川持光などの領主名が知られる程度である。戦国期の小野保は三春田村氏に掌握され、後に伊達政宗の支配下に入る。

磐越自動車道に伴う発掘調査が猪久保城跡と鴨ヶ館跡で実施された。それによると、猪久保城跡は時期が限定できる城館の最古の調査例で、室町初期の居館型山城で短期間のうちに破却されている。鴨ヶ館跡からは戦国期の居館型山城であることが明らかとなった。

近世以降は上杉氏・蒲生氏・丹羽氏・松平(奥平)氏・松平(結城)氏・越後高田榊原氏や幕領・磐城平藩・笠間藩・新発田藩などの預り地となった。鍛冶久保遺跡からは18世紀末～19世紀前半の建物跡や窯跡などが検出されている。

明治期の町村合併により小野新町村(6か村合併)・飯豊村(5か村合併)・夏井村(6か村合併)となり、昭和30年には小野新町・飯豊村・夏井村の1町2か村の合併により小野町が誕生した。

#### 引用文献

- |               |                      |
|---------------|----------------------|
| 小野町           | 1987 『小野町史 資料編Ⅰ(上)』  |
| 小野町           | 1992 『小野町史 通史編』      |
| 福島県農林水産部農地計画課 | 1996 『土地分類基本調査：小野新町』 |

# 第1編 <sup>せり</sup>反 <sup>た</sup>田 C 遺跡

遺跡記号 ON-ST-C

所在地 田村郡小野町大字菖蒲谷字反田

調査期間 平成15年5月7日～6月13日

調査員 吉野 滋夫・横須賀 倫達



# 第1章 遺跡の環境と調査経過

## 第1節 位置と地形

反田C遺跡は小野町の中央やや西寄りの菖蒲谷地区にあり、町の中心市街地である小野新町からは直線距離約4.5kmの位置にある。その経路は、黒森川に沿って走る県道小野・矢吹線を平田村方面に進みJRバス堂田停留所を過ぎた辺りから、黒森川を挟んで対峙する丘陵が県道に迫ってくる。黒森川の侵蝕により発達した谷底平野が一旦途切れる地点にあたる。丘陵には菖蒲谷総合運動公園があり、その西側の谷を隔てた尾根に遺跡がある。

遺跡の地形は山地の斜面に区分され、現況は杉の植林地であった。範囲は比高差約70mの2本の谷により東西を画され、北側は黒森川によって侵蝕された崖により画された尾根と東側谷部の一部である。遺跡の標高は470～479mで、475m以下では緩傾斜であるが、それ以上となると急傾斜で登るのも容易ではない。強風の際には風の通り道と思える程吹き荒れ、この場所にいるのがとても辛い。黒森川には標高471m以下となるA3～E2グリッドにかけては、基盤を形成している角閃石黒雲母花崗閃緑岩の露頭がみえている。こまちダム遺跡群のなかで縄文時代後期の土器が出土した点数は少ない。

近隣に所在する遺跡を挙げると、周知の遺跡で縄文土器の散布地として「福島県遺跡地図」に登録されていた堂田遺跡があったが、運動公園造成によって消滅してしまったらしい。同じ字名を付けた遺跡である反田遺跡・反田B遺跡は、福島空港・あぶくま南道路遺跡調査の表面調査で発見された遺跡である。この2遺跡は反田C遺跡から直線距離にして約1km離れ、別の丘陵に位置している。反田遺跡は土師器の散布地で、反田B遺跡からは縄文時代晩期後葉の住居跡と縄文時代中期後葉の土器埋設遺構が検出されている。

## 第2節 調査経過と調査方法

**調査経過** 反田C遺跡は、条件整備が整った平成15年5月7日からバックホー1台を搬入して表土の排土を開始した。発掘調査面積は1,200㎡である。本遺跡ではダムの常時満水位となる標高479m以下の調査を実施した。19日には作業員17名の雇用手続き、引き続き安全衛生講習を行った後、現地作業に着手した。まず、通路の整備と調査区の縄張り・看板の設置などの環境整備を行い、遺構検出作業を開始した。遺構検出作業は順調に進み、試掘調査で検出した土坑の確認も行った。C2グリッドからは縄文時代早期・前期・後期の土器が出土した。

6月に入ると堂田A遺跡の遺構検出作業のため、作業員を割振った。6月上旬には黒褐色土上上面での調査が終了したので、バックホーで黒褐色土を除去することとした。

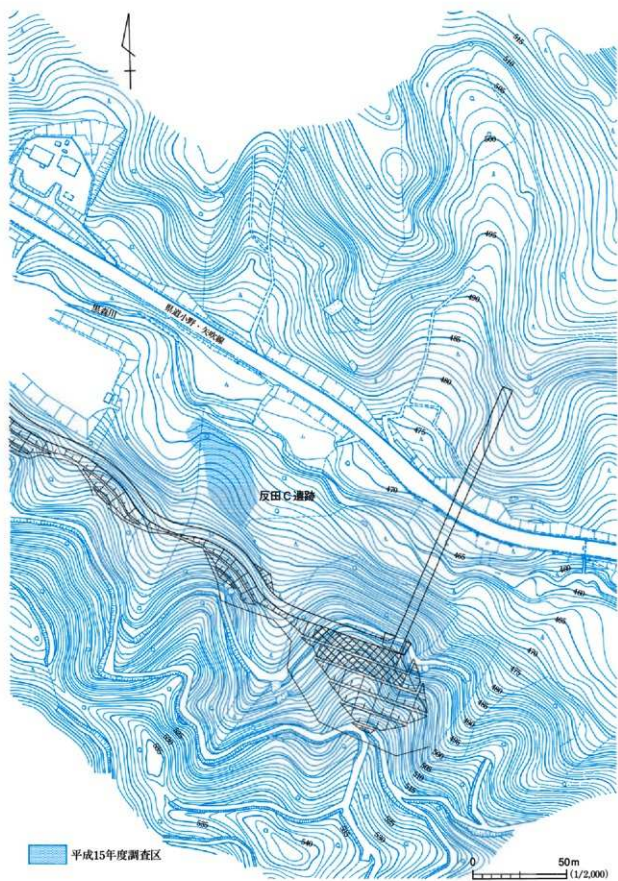


図1 調査範囲と工事計画図

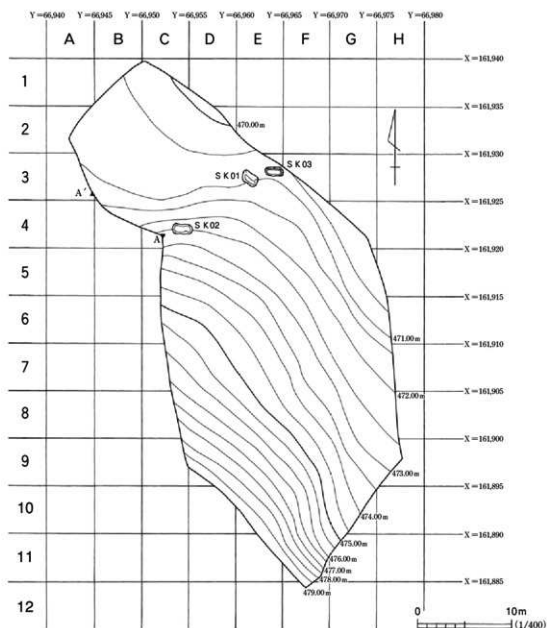


図2 遺構配置図

遺跡の基盤上である第V層上面で遺構検出を行い土坑2基を確認した。6月中旬には遺構の調査・地形測量を終えて6月13日に反田C遺跡の調査を終了した。12月17日に堂田A遺跡・西田H遺跡と共に県中建設事務所に引渡した。

**調査方法** 国土座標X：161,940，Y：66,940を基点として、遺構の測量のため遺跡に5m方眼を巡らせた。東から西へはA・B・C・・・Hとし、北から南へは1・2・3・・・12と称した。それらを組み合わせて各グリッドを表記した。遺構の記録は、縮尺20分の1で断面図と平面図を作図した。写真は35mm判のモノクローム・カラーリバーサルフィルムで撮影した。

調査記録・出土資料などは、当事業団が定めた整理基準に沿って整理を行い、報告書刊行後は財団法人福島県文化財センター白河館に收藏される予定である。



## 第2章 遺構と遺物

## 第1節 遺構の分布と基本土層

遺構の分布(図2) 反田C遺跡から検出された遺構は土坑3基である。出土遺物は縄文土器78点で、遺物の年代は縄文時代早期・前期・後期である。そのなかで主体を占めるのは、早期末葉から前期初頭にかけてのものである。

遺跡は黒森川に南延する痩せ尾根と谷の一部を含んだ範囲である。今回の調査で検出した遺構は、尾根の西側緩斜面C4・E3グリッドに位置する。これらのものは、その形状から落し穴状土坑に類するものであるが、底面からはいずれも杭状施設はみられなかった。土坑が立地するのは、調査区南側の急傾斜から緩傾斜に変換する地点で、尾根の等高線に対して長軸方向がほぼ並行している。このような状況から推測すると、黒森川沿い湿地を動物の水場もしくは体温を冷やすための場所と仮定すると、尾根から降りてくる動物を狙った罠の一つとして考えることができよう。

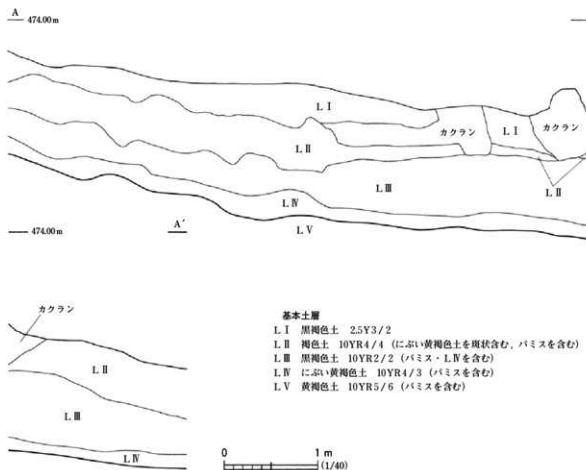


図3 基本土層図

基本土層(図3・4) 調査区内の堆積土は適潤性褐色森林土壌で、角閃石黒雲母花崗閃緑岩を母材とするものである。調査区は北側が急傾斜の斜面で南側は緩傾斜となる尾根先端部であるため、堆積土は南から北へと層厚が増してゆく。調査区の基本土層を土色の違いから、第Ⅰ層～第Ⅵ層まで区分した。

第Ⅰ層は現表土で土色は黒褐色土、調査区内全域に堆積する。層厚は18～32cmである。

第Ⅱ層の土色は褐色～にぶい黄褐色土で、ほぼ標高475.5m以下に堆積する。層厚は20～50cmである。木の根により層離面は乱れている。

第Ⅲ層の土色は黒褐色土である。縄文土器はこの層から出土した。第Ⅲ層は第Ⅱ層とほぼ同じ堆積分布を示しているが、調査区東端および南東部では確認していない。層厚は20～60cmである。

第Ⅳ層の土色はにぶい黄褐色土で、B3グリッドを中心とする第Ⅲ層と同様の堆積分布を示している。基盤層との漸移層である。層厚は20cmほどである。

第Ⅴ層の土色は黄褐色土で調査区内の基盤層をなすものである。土坑はこの層の上面から検出した。C1グリッド辺りでは黒森川の侵蝕が著しく花崗岩の巨岩が露出している。

第Ⅵ層は1号土坑を断ち割った際に確認したものである(図4)。土色はにぶい黄橙色砂質土で、細かく砕けた花崗岩が含まれていた。

## 第2節 土坑と遺構外出土遺物

前節の遺構の分布で述べたように、以下に述べる土坑は、従来落し穴状土坑と呼ばれているものに形状が似ているが、底面からは杭状施設は確認していない。遺物はC2グリッドからのみ出土した。

### 1号土坑 S K 01 (図4、図版3)

1号土坑はE3グリッドの第Ⅴ層上面から検出した。ここは尾根先端から西側の谷への落ち際となる標高471mの地点である。本土坑の東側には3号土坑が隣接し、南西側には2号土坑が約70m離れた位置にある。平面形は不整長方形で、特に西側は崩れた形状である。断面形は逆台形となり、底面は斜面の傾斜に沿って傾いている。規模は長軸が1.9m、短軸は1.2m、深さは0.7mである。長軸方向は真北に対して西に傾く。

堆積土は5層に区分した。そのなかで第2・4層が黒褐色土であること、ほとんどの堆積土に第Ⅳ層が塊状もしくは粒状に含まれていることから、第Ⅲ層から掘り込まれていたと考えている。堆積土は暗褐色～黒褐色土のみであるので、短期間のうち土坑が埋没したことが分かる。

本遺構の形状から落し穴状土坑と考えている。時期は明確ではないが、第Ⅲ層からは縄文土器が出土していることから縄文時代に属するものであろう。



## 2号土坑 SK02 (図4, 図版3)

2号土坑はC4グリッド第V層上面から検出した。ここは尾根の傾斜が、急傾斜から緩傾斜に変換する標高472.5mの地点である。本土坑から北東側約70m降った地点には1号土坑がある。平面形は隅丸長方形、断面形は逆台形で、底面は平坦である。規模は長軸が2.1m、短軸が1m、深さが0.8mである。長軸方向は真北に対してほぼ東西方向を指している。堆積土は4層に区分した。第2層は第IV層、第3層は第V層に対応するものである。これらの層は塊状に堆積していることから、壁の崩落土または掘上土の流入である。第2層と第3層の堆積状態から、土坑の使用後まもなく壁が崩れ大半が埋まってしまったのだろう。本土坑の掘り込み面は第IV層であることが窺われる。本遺構は、形状から落し穴状土坑とすることができよう。時期は遺構の掘込面の検討から、1号土坑よりも古い時期の遺構として捉えることができる。よって、時期は縄文時代のものであろう。

## 3号土坑 SK03 (図4, 図版3)

本遺構はE3グリッドの第V層上面で検出した土坑である。本土坑が位置するのは、尾根先端部の標高470.5mの地点である。本土坑に西接して1号土坑があり、南西側約10m登った地点には2号土坑がある。平面形は整った隅丸長方形、断面形は逆台形で底面は平坦である。規模は長軸が1.9m、短軸が0.9m、深さが0.9mである。長軸方向は2号土坑と同様に真北に対してほぼ東西方向を指し、等高線に対して並行する。堆積土は5層に区分した。第3層は周壁の崩落土で第V層に対応するものである。基本的には2号土坑の堆積状況に似ていることから、ほぼ同時期に埋没したことを窺わせる。本土坑は立地状況や堆積状況など2号土坑と似ている点が多い。このことから、落し穴状土坑としてほぼ同時期に機能し、その使用を終えたものとみられる。

## 遺構外出土遺物 (図4・図版4)

遺構外から出土した遺物はすべて縄文土器の破片で、C2グリッド第III層からのものである。この地点からは、試掘調査で竪穴住居跡があることが報告されている。このトレンチはむしろ・土のうなどで養生されていた。そのため、容易に見つけることができたので再度精査を行った。その結果、壁の立ち上がりが認められないこと、住居内施設である炉や柱穴などが見つからないなどの調査初見から、試掘調査で竪穴住居跡としたものは、遺構ではないと判断した。しかし、遺物の出土状況が限定された場所と層位となっていることから、そこに何らかの人為的な営みがなされていたことが窺われる。

縄文土器は78点が出土した。8は縄文時代早期中葉のもので、棒状工具による刺突文が施されている。1～4は縄文時代早期末葉～前期初頭の範ちゅうに含まれ、主体を占める。いずれもLRの斜縄文が施されている。1は口縁部であるが、口縁が欠けている。5～7は縄文時代後期のもので、外面に櫛歯状工具による横位の流水文が施されている。

## 第3章 ま と め

反田C遺跡は当初、平成13年の表面調査により遺跡推定地B15とされた。平成14年には試掘調査が行われ、竪穴住居跡と土坑が検出された。この結果から、遺跡推定地B15は反田C遺跡と登録され、遺跡面積は1,200㎡となった。平成15年度に発掘調査したのは1,200㎡のうち常時満水位の標高479m以下であるが、それ以外の遺跡範囲についても遺構・遺物の確認を行っている。

本遺跡は、黒森川沿いの標高550mを越える山地の北裾にあたる。調査区は尾根と谷の一部を含み、南から北にかけて傾斜する。その傾斜の程度は、南側が急で北が緩やかである。このように、遺跡は険しい地形に立地し、付近にある黒森川の増水によって絶えず冠水の恐れがあることなど、集落を営むような適地ではない。

遺構は土坑3基を検出し、緩傾斜となる尾根先端から尾根から谷への落ち際を掘り込んでいた。遺物は縄文土器がC2グリッドから78点が出土したものの、それ以外のグリッドや土坑内からは出土していない。こまちダム遺跡群内でみると、本遺跡は遺構・遺物ともに希薄である。さらに、本遺跡が立地する北側斜面には堂田遺跡しかなく遺跡が少ない。

土坑はいずれも平面形が隅丸長方形を基調とし、断面形が逆台形となっている。このような形状の土坑は従来の研究によれば、落し穴状土坑とされているものと似ている。しかし、底面には杭状施設が認められない。特に2・3号土坑は、斜面の傾斜に対し直交している。その配置から、あたかも黒森川沿いの湿地を目的に、山地から降りてくる動物を捕らえるため設けられたものであろう。

こまちダム遺跡群の西田H遺跡からは、同じような土坑は検出されていない。だが、本遺跡から東へ1.1km離れた地点にある柳作B遺跡・柳作C遺跡は、あぶくま高原道路建設に伴う発掘調査で同様な土坑が検出されている。これらの遺跡は本遺跡と異なり丘陵頂部や段丘に立地するが、菖蒲谷地区では必ずしも特異な遺構ではないことが分かる。時期は遺構の性格上明確になし得ないが、2・3号土坑の堆積土下部には第Ⅲ層がみられない。このため第Ⅲ層堆積以前の所産であると考えている。

遺物は縄文時代早期中葉～早期末葉～前期初頭～後期のものが出土しているが、主体を占めているのは早期末葉～前期初頭のものである。遺物が出土した地点は、試掘調査のトレンチで竪穴住居跡とされた地点でもあるが、壁の立ち上がりや住居施設がないことから遺構ではないと判断した。縄文早期～前期初頭の遺物は、こまちダム遺跡群の各遺跡や町内の各遺跡で主体的に出土しているので、特色の1つとして挙げられよう。

### 引用文献

福島県文化センター編「福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告4」1999年

第2編 沢目木遺跡  
(2次調査)

遺跡記号 ON-SMK

所在地 田村郡小野町大字雁股田字沢目木

調査期間 平成15年6月17日～6月20日

調査員 横須賀 倫達



# 第1章 遺跡の環境と調査経過

## 第1節 位置と地形(図1)

沢目木遺跡は、田村郡小野町大字雁股田字沢目木に所在する。雁股田地区は小野町の中央西寄り、町の中心となる小野新町からは西へ約4.9kmの距離に位置する。本地域には主幹道路として県道矢

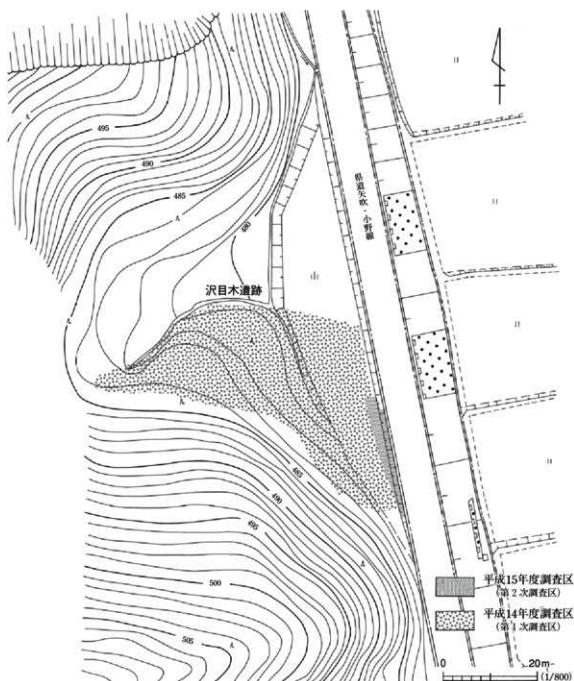


図1 調査区位置・周辺地形図



吹・小野線があり、国道349号と国道49号を結んでいる。

本地区は、北は大字小野山神・大字菖蒲谷、東は大字塩庭、西は郡山市田母神地区、南は平田村蓬田地区と境を接している。雁殿田地区には黒森・十石両河川とこれらの水源となる小支流によって形成された小段丘が点在し、この上に集落が営まれている。本地区の現況は丘陵部が山林、沢周辺は水田となっている。

沢目木遺跡は北流する黒森川支流の西岸に位置し、東に延びる小丘陵の北東裾に広がっている。遺跡の範囲は、北側が水田の造成による削平、東側は地盤の急激な落ち込みが現在の県道部分に潜り込むことによって確定する。また遺跡の南～南西側は丘陵部の急斜面へ連続している。本遺跡と丘陵頂部の比高は約50mあり、丘陵の北側斜面は険峻となる。調査区内の比高は約4mであり、南西から北東側に向かって斜度を緩めながら下がる地形となっている。

## 第2節 調査経過と調査方法

**調査経過** 沢目木遺跡は平成12年度に(財)福島県文化振興事業団が行った試掘調査の成果により、縄文時代前期・晩期の遺物散布地として登録された遺跡である(『福島県内遺跡分布調査報告7』:2001)。沢目木遺跡の1次調査は1,600㎡が発掘調査を必要とする面積として平成14年5月～7月に行われ、その成果は報告書にまとめられている(『こまちダム遺跡発掘調査報告1 沢目木遺跡』:2003)。

平成15年度に入り、1次調査範囲東側に位置する県道の付け替え工事が終了したため、県道に隣接した100㎡の範囲について発掘調査が可能となった。6月17日、福島県教育委員会の委託を受けた(財)福島県文化振興事業団によって沢目木遺跡の2次調査が開始された。

6月17日、重機を投入して調査範囲の表土除去作業を行った。翌日、調査員1名、作業員7名の体制で遺構検出作業を開始。午前中には1次調査範囲から延伸する2号遺物包含層とビット2個を検出した。午後には包含層の掘り込みとビットの精査を開始、翌19日にはほぼ終了した。

調査開始から4日目、6月20日に地形測量図、土層断面図の作成、調査範囲の全景写真撮影を行って調査の全工程を終了した。

**調査方法** 今回の調査では1次調査で用いた[X:141,930・Y:66,450]の測量原点(国土座標Ⅱ系)と、調査区内を東西南北5mの幅に区切り、原点から東にA・B・・・、南に1・2・・・と呼称するグリッド設定を踏襲した。グリッド名はこの組み合わせによりS10・T11などとなる。

遺物の取り上げは、原則的に出土位置と層位を記録し、適宜写真撮影を併行して行っている。記録写真撮影は35mmの小型カメラと、必要に応じて6×4.5cmの中型カメラを使用し、フィルムはモノクロ・カラーリバーサルを併用している。実測記録は前述の測量座標を用いて、遺構平面図や土層断面図を1/20、地形測量図を1/200の縮尺で作成した。

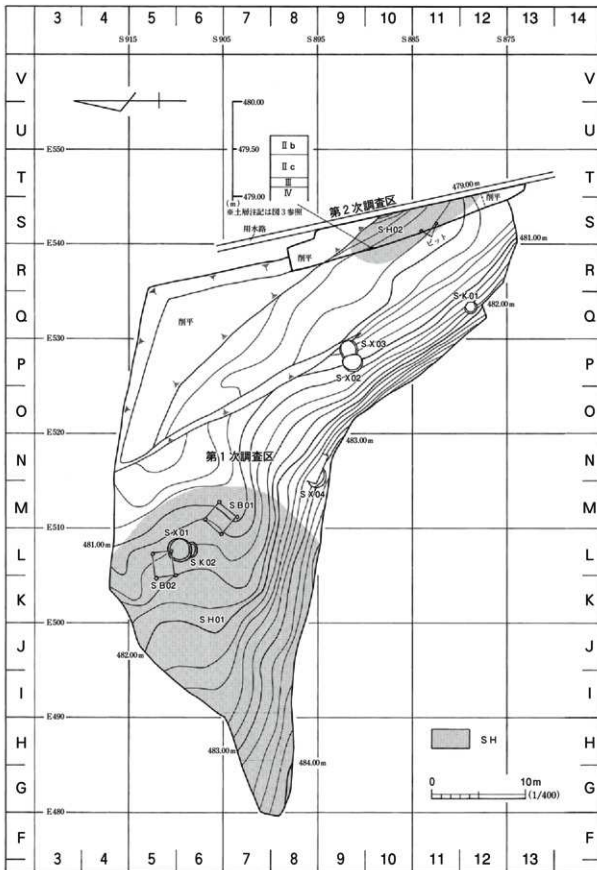


図2 遺跡全体図・基本土層

## 第2章 調査の成果

### 第1節 遺構の分布と基本土層

遺構の分布(図2) 沢目木遺跡の範囲は東西約65m、南北約40mに広がり、東側で鉤の手状に南へ折れ曲がる形状となる。平成14年度に行われた1次調査では1,600㎡の範囲に縄文時代早期前葉の竪穴状遺構4基(1～4号竪穴状遺構)、土坑1基(2号土坑)、時期不明の掘立柱建物跡2棟(1・2号掘立柱建物跡)、土坑1基(1号土坑)及び縄文時代前期・縄文時代晩期～弥生時代前期の遺物包含層(1号遺物包含層)、縄文時代早期の遺物包含層(2号遺物包含層)を検出している。

平成15年度に行われた2次調査は、1次調査範囲の南東側に連続する100㎡を範囲とし、1次調査範囲から連続する遺物包含層1ヶ所(2号遺物包含層)とピット2個を検出した。遺物包含層は本年度調査範囲の大部分を覆っているが、北側は基盤層下まで及ぶ削平、東側は基盤層の急激な落ち込み、南側は丘陵の急斜面により画される。ピット2個はS11グリッドにおいて検出されている。

**基本土層**(図2) 本遺跡の基本土層は、1次調査において7層に分けられた。本遺跡の範囲は南側に横たわる丘陵の裾部に広がっており、この丘陵から流れ込んだ黒～黒褐色土が比較的厚く堆積している。今回の調査範囲においてはこのうち5層が確認され、以下その内容のみを記す。観察地点はR10グリッド、及び調査区東壁の2箇所である。

I b層：県道建設時の盛土層である。調査範囲の北側は特に厚く、3m以上を測る。

II b層：黒色土。層厚は20cm前後を測る。層中には縄文時代早期末葉の遺物を包含する(2号遺物包含層)。

II c層：黒褐色土。層厚は最大で40cmを測る。層中には縄文時代早期前葉の遺物を包含する。(2号遺物包含層)。II b層とは層中に雲母を多量に含むことで識別される。

III層：暗灰黄褐色土。地山漸移層。本層は無遺物層である。

IV層：明黄褐色土。基盤層である。

### 第2節 遺構と遺物

今回の調査で確認した遺物包含層は、1次調査範囲南東端において調査された2号遺物包含層と地理的・内容的に連続するため、2号遺物包含層の呼称を用いる。

#### 2号遺物包含層 SH02(図3、図版2・4)

**概要** 本包含層は沢目木遺跡の東端、東へ延びる小丘陵の端部裾となるR～T9～12グリッドに存在し、周囲は北東方向に下がる緩斜面となっている。1次調査においてR10・S10・S11グ

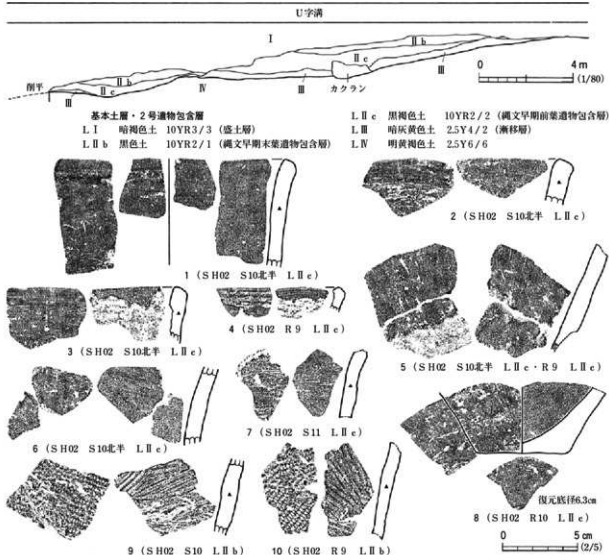
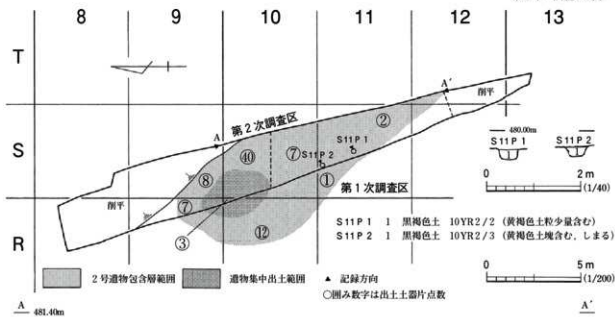


図3 遺構と遺物

リッドで確認された2号遺物包含層に連続する。

地形的な観点から遺物包含層の存在が推測されるR9・S9グリッド以北は、削平が基盤層下まで及んでいる。また、東側は基盤層の急激な落ち込み、南側は丘陵の急斜面により遺物包含層の範囲が画される。

遺物を包含する土層はⅡb層とⅡc層の2層に分けられる。Ⅱb層は斜面のやや上位となる西側に厚く堆積している傾向がみられ、層厚は約20cm前後を測る。Ⅱc層は斜面のやや下位となる東側に厚く堆積しており、層厚は最大で40cm程となる。

遺物 遺物は縄文土器片67点が出土した。出土土器のうち縄文・条痕文土器がⅡb層から8点、無文土器がⅡc層から59点である。各グリッドから出土した土器片数は図中の○囲み数で示した。1次調査分と合わせ、S9・R9・R10グリッドに集中出土範囲が認められる。

1～8は縄文時代早期前葉の無文土器である。破片資料のため明確でないが、個体数は限定される可能性が高い。

1・2の口縁部はわずかに外反するのに対し、3は口縁部がほぼ直立する。1～4とも口唇端は平坦状に作られる。1・3・4の外門口縁部下には横方向のミガキ、2には横方向にケズリの痕跡が確認される。

5～7は胴部片であり、5・6は縦方向にミガキが施されている。8は底部片である。明確な平底であり、底面にもミガキが認められる。これら無文土器は褐色～暗褐色の色調を呈し、胎土に長石・石英粒が多量に含まれる点で共通する。また、微量ではあるが1～3・7には繊維混和痕が確認される。

9・10は縄文時代早期末葉の縄文・条痕文土器の胴部片である。繊維を多量に含有する。

まとめ 1・2次調査の成果を総合すれば、本包含層は縄文時代早期前葉及び末葉の遺物包含層と結論付けられる。縄文時代早期前葉の遺物については、斜面上位に存在する遺構群(竪穴状遺構4基・土坑1基)との関連が想定される。

### ピット(図3、図版3)

S11グリッドに位置する。2個のピットいずれもⅣ層で検出したものであるが、黒褐色を基調とした堆積土の観察から、本来は遺物包含層上から掘り込まれていたものと判断される。

2個とも直径20cm前後の円形であり、検出面からの深さは10cm程度である。近接した位置に同内容のピットは認められないが、1次調査においても同様の規模・堆積土となるピットが調査されており、これと同時期の関連する遺構と考えられる。遺物は出土していない。

### 第3章 ま と め

#### 第1節 縄文時代早期の無文土器について

第2次調査出土資料の特徴 無文土器から抽出される属性のうち、第1次調査出土資料では認められなかったもの、または留意すべき特徴のみ以下に挙げる。

- ①器形：底部片は明確な平底であり(図3-8)、復元底径は6.3cmと比較的小さい。
- ②器面調整：外面の口縁部周辺に横方向のケズリ調整が認められる資料が存在する(図3-4・7)。
- ③繊維含有：微量ではあるが、含有の認められる資料が存在する(図3-1～3・7)。

編年の位置付けの補足と今後の課題 沢目木遺跡から出土した無文土器の編年の位置付けについては、第1次調査報告書において詳しく検討した。そこで本遺跡の無文土器は、主に東関東に分布し「花輪台Ⅱ式」とされた無文土器群との関連を考えた(横須賀2003)。若干の資料が追加された第2次調査の成果を踏まえても、前稿で示した結論に変更はないが、先に挙げた①～③について少し触れておきたい。

①明確な平底の資料が追加された。沢目木遺跡資料の他、第1次調査報告書で第Ⅲ段階とした資料のうち、いわき市竹之内遺跡(馬目1982)、棚倉町中丸遺跡(井上1983・1987)、第Ⅳ段階とした白河市一里段A遺跡(今野2000)においても平底の資料が確認されている。現在まで第Ⅲ段階とした資料に明確な尖底土器は認められず、福島県南地域では第Ⅲ段階を中心として平底にほぼ統一されている可能性が高い。

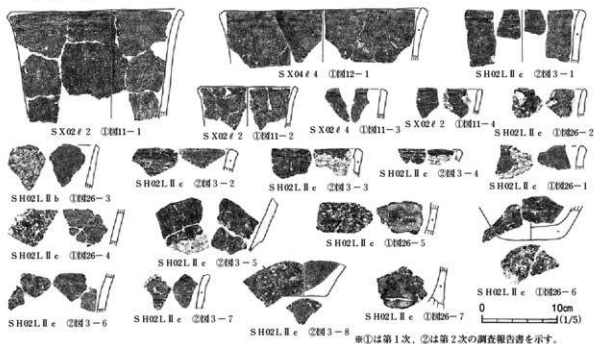


図4 沢目木遺跡出土無文土器集成

②ケズリによる擦痕を残す土器(以下「擦痕土器」とする)が認められ、少数だが沢日本遺跡の組成にも加わることが確認された。後続する第Ⅳ段階とした一里段A遺跡資料の内容は、多数の「擦痕土器」に少数のミガキを施した土器が混在する。

③繊維を含有する個体が一定量存在する。これは第Ⅲ段階とした竹之内遺跡や大越町馬場平B遺跡(本間1993)と共通する。また第Ⅱ段階としたいわき市龍門寺遺跡(高島1985)の資料にも少数認められるが、第Ⅳ段階には継続しない。

以上第Ⅲ段階を表象する属性内容として①～③を追加したい。②で示した一里段A遺跡との「擦痕土器」の組成に占める割合の変化は、時間的連続性を示すものとして理解される。また前稿では、本県域において第Ⅳ段階とした無文土器及び初期沈線文系土器は、第Ⅲ段階の無文土器を祖型として、東関東地域に分布する中村氏が天矢場式とした「擦痕土器」(中村2002)の影響を受けて成立した可能性を述べた。今回追加された資料により、中村氏のいう「天矢場式」は、一部が本県域の第Ⅲ段階と併行する可能性までも考えておきたい。

③についても留意する必要がある。胎土に繊維を含有する土器として、東北地方一円に分布し、初期沈線文系土器へ影響を与えたとされる日計式押型文土器が挙げられる。共存例が少なく、検討すべき型式内容の懸隔も多いが、初期沈線文系土器の成立と無文土器、日計式押型文土器の関連を検討する際は無視することのできない属性内容ではないだろうか。

## 第2節 調査の総括

第1・2次調査で検出した遺構は竪穴状遺構4基、掘立柱建物跡2棟、土坑2基、ピット2個、遺物包含層2ヶ所となった。また、出土した遺物は縄文土器(早期前葉・早期末葉・前期後半・前期末葉・晩期末葉)、弥生土器(前期前半)及び石斧や石鎌などの石器である。これらのほとんどは第1次調査の成果であり、遺構の変遷や遺物についての検討は第1次調査で既に報告している。

沢日本遺跡の位置する阿武隈山系には、縄文時代早期～前期にかけての遺跡が多数存在するという特色がある。この時期が主体となる本遺跡についての理解を深化させ、さらに地域の特性を浮彫りするためには、蓄積された資料の体系的な検討と理解の再構築が必要である。

### 引用・主要参考文献

- |             |      |  |
|-------------|------|--|
| 馬目順一・吉田生哉   | 1982 | 「竹之内遺跡—縄文時代早期の調査—」いわき市教育委員会              |
| 井上國男        | 1983 | 「棚倉町中丸遺跡出土の早期縄文土器」『福島考古24』福島県考古学会        |
| 高島好一・廣岡 敏   | 1985 | 「龍門寺遺跡—重要幹線街路事業に伴う調査—」いわき市教育委員会          |
| 井上國男・高山真一   | 1987 | 「棚倉町中丸遺跡出土の無文土器—新資料の報告—」『福島考古28』福島県考古学会  |
| 本間 宏・佐藤 啓 他 | 1993 | 「馬場平B遺跡」『東北横断自動車道遺跡調査報告20』福島県教育委員会       |
| 今野 徹・石本 弘 他 | 2000 | 「一里段A遺跡」『福島県文化財センター—白河館遺跡発掘調査報告』福島県教育委員会 |
| 中村信博・中村紀男   | 2002 | 「天矢場遺跡—民間開発に伴う天矢場遺跡第2次発掘調査報告書—」茂木町教育委員会  |
| 横須賀倫達・並井崇吉  | 2003 | 「沢日本遺跡」『こまちダム遺跡発掘調査1』福島県教育委員会            |

第1編 反田 C 遺跡  
写真図版



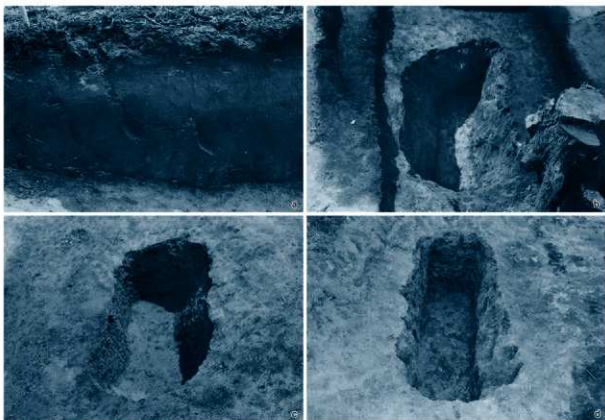




1 調査区全景（北から）

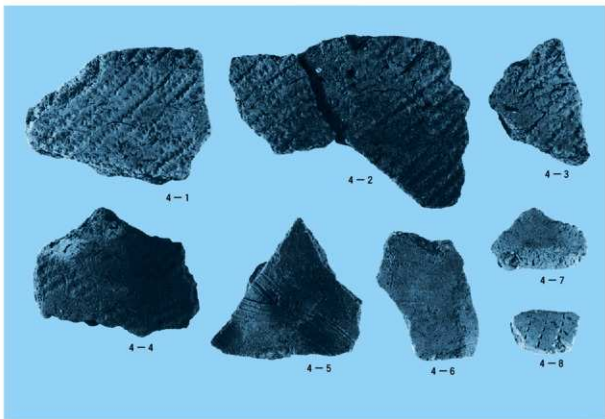


2 調査区北西部(南から)



3 基本土層・1～3号土坑

a 基本土層(南から)      b 1号土坑全景(東から)  
 c 2号土坑全景(西から)      d 3号土坑全景(東から)



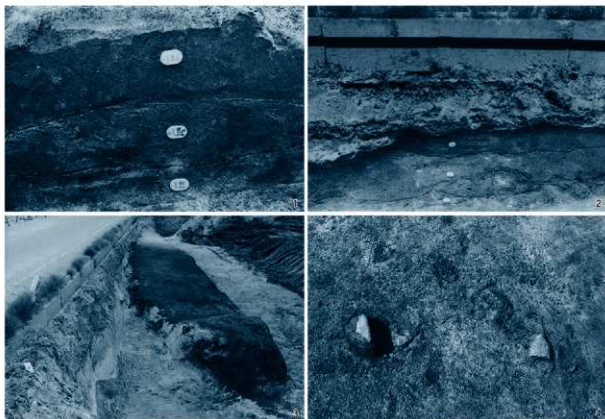
4 遺構外出土土器

第2編 沢目木遺跡  
(2次調査)  
写真図版



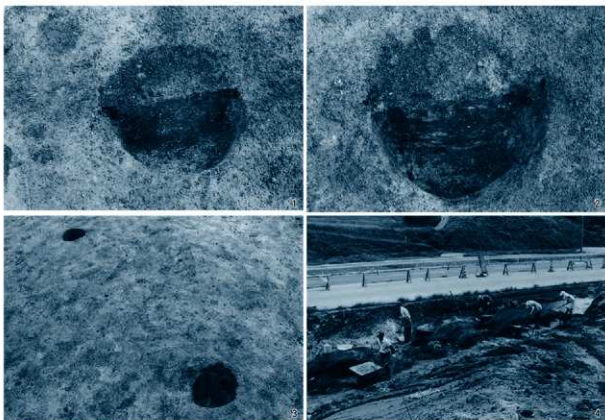


1 調査区全景(北から)



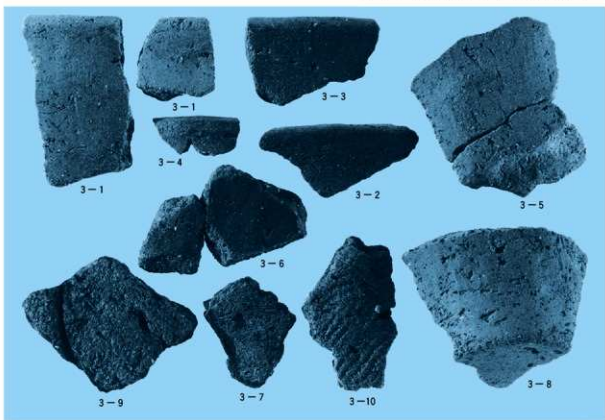
2 2号遺物包含層

1 土層断面①(東から) 2 土層断面②(西から)  
3 発出状況(北から) 4 遺物出土状況(北東から)



3 ピット

1 P1土層断面(東から) 2 P2土層断面(東から)  
3 P1・P2完掘(東から) 4 作業風景(東から)



4 2号遺物包含層出土土器

# 報告書抄録

ふりがな	こまちだむいせきはくつちようさほうこく							
書名	こまちダム遺跡発掘調査報告2							
シリーズ名	福島県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第418集							
編者名	吉野温夫・横須賀倫達							
編集機関	財団法人福島県文化振興事業団 遺跡調査部 遺跡調査課 〒960-8116 福島県福島市春日町5-54 Ⅲ 024-534-2733							
発行機関	福島県教育委員会 〒960-8670 福島県福島市杉妻町2-16 Ⅲ 024-521-1111							
発行年月日	2004年3月26日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		東経 ° ′ ″	北緯 ° ′ ″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
反田 C	福島県田村郡 小野町大字 宮森谷 字反田	522	00145	140° 35′ 6″	37° 27′ 3″	2003年5月7日 ～ 2003年6月13日	1,200㎡	ダム(こまちダム)建 設に伴う事前調査
沢目 木	福島県田村郡 小野町大字 雁股田字 沢目木	522	00143	140° 34′ 49″	37° 27′ 48″	2003年6月17日 ～ 2003年6月20日	100㎡	同上
収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
反田 C	狩猟場	縄文	土坑(3)		縄文土器	土坑の形状はすべて落し穴状土坑に類する。		
沢目 木	集落跡	縄文	遺物包含層(1) ピット (2)		縄文土器	縄文時代早期の遺物包含層。2次調査。		

経緯度数値は世界測地系による

福島県文化財調査報告書第418集

## こまちダム遺跡調査報告2

反田C遺跡

沢目木遺跡(2次調査)

平成16年3月26日発行

編集 財団法人福島県文化振興事業団遺跡調査部

発行 福島県教育委員会 (〒960-8688) 福島市杉妻町2-16

財団法人福島県文化振興事業団 (〒960-8116) 福島市春日町5-54

福島県土木部 (〒960-8070) 福島市杉妻町2-16

印刷 株式会社日進堂印刷所 (〒960-2194) 福島市庄野字柿場1-1